

第26回『命の木』

第26回目の道德では、屋久島の原生林についての文章を通して、自然の雄大さや生命の尊さについて考えました。このお話は、鹿児島県立図書館長を19年にわたって務めた作家の椋嶋十さんが、1980年代に書いた随筆です。屋久島には原生林が広がり、杉で知られています。樹齢1000年以上の杉を「屋久杉」といい、それ以下は「小杉」といいます。樹齢2～3000年の杉もざらにあります。それらの杉が倒れた後、その上に種子が芽生え、また樹齢を重ねています。また、樹齢3000年の「大王杉」、樹齢7200年と推測される「縄文杉」という杉もあります。根回り41メートルもある縄文杉の前に立ったとき、筆者は、うなり声を上げるほど感激します。ごつごつした木肌ではあっても、老木の衰えを感じさせるみじめさはなく、堂々とそびえているのです。葉は青く、美しく命が燃えているのを見て、筆者は、このように、命燃えたままで美しく老いたいとしみじみ思うのでした。

みんなの意見

筆者は、どんな思いで、

屋久杉を「命の木」とよんだのでしょうか。

- 筆者は、屋久杉を見て生命力を感じたから、「命の木」とよんだのだと思う。
- 木が死んでも次の命が芽生えて、永遠に命が途切れず何年も生きてきたから。
- 自然の力だけで、こんなにも育っているから、「命の木」とよんでいる。
- 老木なのに若々しく、葉などがあって、生きている感じがするから。
- 昔からある木だから、世の中の人に知ってもらって、次の世代の人に受け継いでもらうため。昔から命を受け継いでいる感じがするから。
- 自分達より長く、日本列島の生き物の生死を見てきたから。
- 倒れた木の上に種子が落ちて、芽が生えて生命をつなげているから。



**命を受け継いでいるのは、
人間だけではない。**